

## 訳者あとがき(抜粋) 肥田舜太郎

### はじめに

本書『ペトカウ効果』は、2007年から少しずつ訳し始めたのですが、片手間仕事でなかなか進まず、粗訳を終えたのは2009年の夏の終わりでした。そこで、旧知の竹野内真理さんに訳文と原書を送り、粗訳の点検と間違いの訂正をお願いしたところ、快くボランティアでご協力いただきました。埼玉医療生協本部の近藤和子さんが試読用の30冊の製本作りを手伝って下さり、グールドの前作『死にいたる虚構』(斎藤紀と私の共訳)を再版された小田美智子さんが校正を手伝って下さり、そしてあけび書房の久保則之さんの多大なお力添えで、4年目でやっと刊行できました。お三方と久保さんの献身的なご協力に心からの敬意と感謝の念を捧げます。

(中略)

### 放射線に無知な「核抑止論」

現在、世界の人々が原爆の放射線の被害の実態を知らないために、「核兵器の使用には反対だが、保有は戦争防止に役に立つ」という核抑止論が圧倒的に支持されているように思います。しかし、核抑止論は、核兵器を作り持っているだけで、ヒバクシャを作っている危険性を知らないか、知っていても無視する勢力が作り出したものです。

核兵器廃絶の最大の敵である核抑止論に対抗するためには、核兵器は持っても危険だということを一言で示さなければなりません。そのたびに大論文を演説するようでは間に合わないのです。それには、「核兵器は作る、運ぶ、貯蔵するたびに周辺に放射線の内部被曝者をたくさん作って殺す」ということを伝えなければならないのです。

核抑止論は、仮想敵を圧倒する優れた性能の核兵器を多数持たなくてはならず、そのためには核兵器を絶えず改良し、強化する必要があります。ということは、原料のウランの採掘、濃縮、精製、核爆弾の製造、核廃棄物再処理、核兵器の運搬、貯蔵など爆弾を製造し、保有するすべての過程で、労働者、職員をはじめ周辺住民の中に、常時、放出される低線量放射線の内部被曝でヒバクシャを作り、病気にし、殺している事を意味しています。そういう重大な事実を、どこの国民も全く知らされていません。

核抑止論は、核戦争防止を唱えながら、核兵器を持つことを通じて、眼に見えないヒバクシャを作り出し、平和に生きる市民を知らずに殺していることを深く学んでほしいと思います。

## 終わりに

第二次世界大戦末期のアメリカによる広島・長崎への原子爆弾投下は、人類史の中でどのように意義づけられ、どのように意味づけられるのでしょうか？

人類は20世紀の初頭に核エネルギーという新しいエネルギーを入手しましたが、浅はかにも、それを最初に同族の人間を大量殺戮するために使用する愚行を冒してしまいました。一瞬に大都市を消滅させた巨大な破壊力と、80万人の被爆者を数十年にわたって殺し続ける殺傷能力の大きさと持続性から、通常の兵器とは比較にならない残虐性と非人道性に、日本国民はもちろん、国連のほとんどの国が核兵器の全面廃絶を主張するに至っています。

核兵器の出現、核時代の到来が人類の存続に大きな影響を持つことは明らかです。核エネルギーに対する人間の基本的な在り方について、広い視野から討議を尽くす時期なのではないでしょうか。

2011年5月